

平成 26 年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業  
(特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究)」報告書

団体名	新潟大学
研究開始年度	平成26年度

## I 概要

### 1 指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名
国	特別支援学校	知的障害	にいがただいがかきょういくながふふぞくとくべつしえんがっこう 新潟大学教育学部附属特別支援学校

### 2 研究テーマ

総合大学の附属校内にある発達障害通級指導教室の利点を活かした、学習障害児への効果的な指導法の追究

### 3 研究の概要

学習障害に対する研究は進みつつあるが、通常の学級には依然として読み書きに困難を有し教科学習全般ひいては学校生活、家庭生活にまで影響が及んでいる児童が少なくない。中には二次障害を引き起こすケースも見られる。

当校の発達障害通級指導教室はこれに着目し、総合大学の附属校内にある当教室の利点を活かし学習障害児への効果的な指導法を追究したいと考え、以下のように取り組んだ。

- 1 読み書きに困難がある児童を募集し、個別指導を中心に行った。保護者、在籍校からの情報や各種検査からの対象児童の困難要因の推測、本人の思いや実態に応じた目標の設定、特性に応じた指導方法の追究を行った。
- 2 指導を展開するにあたり、個別の指導計画を作成し、指導の評価・改善については在籍校の担任や特別支援教育コーディネーター、保護者と情報を共有しそれぞれの場の指導に活かした。
- 3 発達障害研究や言語・コミュニケーション障害研究を行っている特別支援教育専修の教育学部教員と連携し、困難さの背景をより客観的に分析し、特性に応じた指導法の検討を行ったり、工学部内にある「新潟市障がい者ITサポートセンター」の教員と連携し、最新のデジタル教材やICT関係の情報を得たりして、指導に活かした。

本研究では、上記のように、発達障害通級指導担当者が、対象児童の在籍校関係者、特別支援教育研究者、工学系専門家を有機的に関連させながら指導法を開発していくことによって効果的な指導法を追究することができ、対象児童の変容を促すことができた。

#### 4 研究の成果

今年度の成果は以下の2点である。

- 1 対象児童の困難の要因を明らかにするため、各種検査や保護者・在籍校からの聞きとりから情報を収集し、分析をした。研究の結果、有効な方法は次の通りである。①読み書きに対する本人の心情面、機能面の実態把握のために、本人の言動や学習への取り組みを受容的に受け止め、安心して本来の姿を出せるようにした。②自己への認識を知るために、徐々に学習課題に負荷をかけたり、教師の支援を少なくしたりして困難に直面した時の反応が分かるようにした。このように、困難の要因を明らかにするには、各種検査や保護者・在籍校からの聞きとりと合わせて、本人の心情面、機能面、自己への認識の3つの視点を意識してかかわることが有効であると分かった。
- 2 対象児童の指導課題は在籍校での学習への参加度が増す課題とした。

注意記憶や言語理解に困難さを持ち、聞き返しがあり、特殊音節の書きとりが不正確な児童には、「分かる言葉を増やすこと」「特殊音節を書くこと」を中心に指導を行った。教科書の言葉を取り出し、本人の得意な力を生かした動作化や視覚化による支援を行ったことで、特殊音節の書き間違いや授業中の聞き返しがほとんどなくなった。書くことに対する抵抗感から国語の授業にほとんど参加できなかった児童には、「苦手な力を補う方法を身に付けること」「授業への参加度を上げること」を目指した。取り組み方のポイントを段階的に教えたり在籍校の授業の1週間分のリハーサル学習に取り組んだりしたことで、少しずつ授業に参加できるようになった。(別紙参照)

#### 5 課題と今後の方策

上記のように一定の成果を挙げた反面、次に挙げる課題が残った。

- 1 在籍校との連携を試みたことにより、限定的ではあるが、授業への参加度を高めることができた。この成果をもとに、2年次は、そこで得た力を他の教科に応用していくことも研究の対象としていく。限られた通級の時間を有効に使いつつ指導の効果を上げるためには、今まで以上に在籍校との効率的かつ有効な連携のシステムを作ることが必要と考える。

また学習の定着を図るためには、家庭での復習が必要になる。しかし今年度は、家庭学習に指導の成果を生かすまでに至らなかった。また、今後学習を進めるにあたっては、自分の得意不得意を理解して、家庭でも学習が進められるような力を育てていく必要がある。そのために、保護者の協力を得て、家庭との連携をもっと図りたい。

今後は在籍校や家庭との効果的な連携の仕方を探り、更に指導の効果を高めたい。

- 2 「読み書き」に困難さを抱える児童への指導法を国語を窓口に追究したことで、国語に対しての意欲的な姿を引き出すことには成果があった。しかし、「読み書き」だけでなく、「算数」の困難さを合わせもつ児童も多く、各授業への意欲的な取り組みを促進するには、「読み書き」だけでなく、「算数」の困難さに対しても指導を行わなければ、教科学習全般に対する苦手意識を軽減させ、学習意欲を回復させることは難しいと考える。今後は「算数」にかかわる領域についても「読み書き」と合わせて取り組む必要がある。